十如是事の研究

執行海秀

一

本書は夙に錄内の第二十八卷に「十如是事」なる題號で收錄せられてゐる。ところで本書の題號は古來必ずしも一定してゐない。錄外第十六卷三十七丁には「法華肝心鈔」といふ題號で收錄せられてゐたものであり、また御書鈔混玉撮要鈔、御書和語式には「法華十如是肝心」といひ、三寶寺御書には「法華經肝心御書」といひ、本滿寺御書には「即身成佛鈔」と題してゐるのである。然し一般には大体錄内目錄の題號を踏襲してゐるのであるから、いまこゝではその通稱に從つて置くことにする。

次に本書の述作年代について、通師の御書目錄には、本書を文永九年二月に係けてゐる。而してその根據は明かでないが、通師は本書を最蓮房へ與へられたものとするので、本書の思想が、かの諸法實相鈔の思想と同一基調にあるところから佐渡述作說を立てたものであらうか。然してこの通師の文永九年說には古來より異論があつて、その說を採用するものはないやうである。健立諦師の高祖年譜並に祖書目次には、本書をかの一念三千理事と一念三千法門と共に正嘉二年に係けてゐる。その後與目、明目、遺文等はこの諦師の說に從つてゐるのである。

ところで本書には年次の記載がないので、そのいづれとも斷定し難い。もつとも本書は理体の本覺三身佛を說いて觀念成佛義を强調するのであるから、その思想は佐前的であるといふことはできよう。然しかゝる思想は佐後の著と傳へられる諸法實相鈔や三世諸佛總勘文鈔等の一群の御書にもあるので、思想的方面のみに依つて本書の佐前述作說を主張することはできないであらう。從つて確實なる意味に於いては本書の述作年代は不明であるといふより外はない。

次に本書の對告衆についても、その記載がないので全く不明である。もつとも通師は最蓮房へ與へられたものとしてゐるが、その根據は明かでないので遽かに首肯し難いのである。

かやうに本書の述作年代並に對告衆は不明であるが、更に本書の御眞跡の所在、並にその所傳についても明かでない。

二

さて本書は法華經方便品の十如是の中、相性体の三如是に依て、三身即一の本覺如來を說き、心性本覺の理体事用の思想に立脚するものである。從つて本書に論ずる迷悟は觀念の世界であつて、それは謂ゆる唯心の淨土、己心の本佛義に外ならないのである。然してかゝる思想は、かの中古天台の理本覺觀心思想と基調を同じうするものであつて開目、本尊兩鈔等の思想と遙かに異なるものである。

もつとも本書のかゝる思想は、本書が佐前の御書であるといふことで辨明できるかも知れない。即ち現行の佐前の遺文中には本書と同一基調の一群の御書があるので、かゝる思想は、聖人の思想的段階の一過程として認むべきものであらうか。然し吾人はかゝる前提を定める前に、かゝる御書自体の成立について考慮を拂ふ必要があるのではなからうかと思はれるのである。そこで以下本書の成立について、文獻的研究を進めてみよう。

由來本書の成立について多少の疑ひを挾んだ人がないではない。即ち薩摩日叡師の　(1)本迹問答十七條に珍承兩師

の加筆として

珍師本第八難云、十如實相の御鈔とて引中さるゝ鈔と天台宗の十如實相鈔と引合見るに寸分もちがはず天台の鈔也此鈔を以て本門弘經の時迹門得益を立てれば誤の中の誤也。謗法也謗法也。巨細に此段不及申沙汰の限也。

といつて、珍師まづ本書成立の價値を疑ひ、本書は天台宗の十如實相鈔と全同であるといひ、次で承師との說を受けて、天台宗の十如實相鈔は慈覺大師の十如鈔のことであると註してゐるのである。

また久成日相師は (2)和語式に、次のやうな意味の理由を以て、本書は慈覺大師の著作を傳寫したものにあらざるかと疑つてゐる。

(一) 本書の述作年代不明なること。

(二) 全篇悉く自行己證の法門であること。

(三) 本書の異本の卷頭にある「敬白法華經即身成佛要云」の文字について不審であること。

(3)啓蒙はこの和語式の說を紹介してその次ぎ下に

されども入文の末に一度も南無妙法蓮華經と申せば等の言あれば異本にも依憑しがたし。

といつて、暗に和語式の說に反對してゐる。これに對して、(4)扶老は和語式の疑ひを支持して本書の成立を疑つてゐるのである。而して異本の卷頭にある法華經即身成佛要について

惠心僧都の書にこれと同名のものあり、觀心本尊鈔に引と之、其の所引の文、書中の文と同しくあるなり。といひ、

次いでこの惠心述作說を訂して

後日見二臨味集上一十紙、法華即身成佛要記一是覺超一述。

といつてゐる。

かやうにこの十如是事は慈覺の十如實相鈔と同文であるといはれ、或は惠心、または覺超の法華即身成佛通記の傳寫にあらざるかといはれてゐるのであるが、この間の問題については、扶老もまだつきとめた研究を進められなかつたかのやうである。こゝに於て私は惠心の著と傳へられる法華即身成佛要記を檢したるに、この書が遺文の十如是事の底本となつたものではなからうかと思はれるのである。そこでいま頃を脈はず兩者を比較對照してその關係を考察してみよう。

三

法華即身成佛要記

(惠全三卷二六三頁)

(A)

我身一本來三身即一一如來也。而法華經云、如是相(乃至)本末究竟等一。初如是相者我形也、是名二應身如來一、云假諦。如是性者云二我心性一、號二報身如來一、云二般若空諦心一也。如是体者我身此身体、是形二應身如來一、云二法性一云二中道一、

十如是事

(縮遺二〇二頁)

(A')

我身が三身即一の本覺如來にてありける事を今經に說て云く、如是相(乃至)本末究竟等文初に如是相者、我身の色形に顯れたる相を云ふなり。是を應身如來とも又は解脫とも又は假諦と云ふなり。次に如是性者、我心性を云也。是報身如來とも又般若とも又は空諦とも云ふなり。三に如是体者、我此身体也、是を法身如來とも又中道とも法性とも寂滅とも云ふ也。

稱二第一義諦一云云

此三如是、是即三身如來三德究竟之体、不レ知レ之云二衆生一、覺二知之一云二聖人一。此三如是爲レ体、自レ此七如是備ルヲ稱二十如是一。此十如是即十界也、自レ此起二百界千如三千世間法一、此法離レ多只一箇之三諦、三諦之外全無二別法一。

謂百界ハ假諦、千如ハ空諦、三千ハ惣体ノ中道也。仍三諦直三身、故萬法一如シテ無二闕減一、三世常恒之究竟佛者是也。故說二本末究竟等一也。

（B）

然則我等九界ノ群類不レ漏二彼覺悟三身一、故迷悟一体更不レ可レ疑。而されば此三如是を三身如來とは云ふなり。此三如是が三身如來にてはしましけるをよそに思ひへだてつるが、はや我身の上にてありける也。かく知るを法華經を悟れる人とは申也。此三如是を本として是より殘りの七つの如是はいでゝ十如是とはなりたる也。此十如是が百界にも千界にも三千世間にも、成たる也。かくの如く多くの法門となつて、八萬法藏と云はるれども凡て只一つの三諦の法にして、三諦の外に法門なき事也。

其故は百界と云は假諦也、千如と云は空諦也。三千と云ふは中諦也。空と假と中とを三諦と云ふ事なれば、百界千如三千世間まで多くの法門と成たりと雖も一つの三諦にてある事也。されば始の三如是の三諦と終の七如是の三諦とは唯一の三諦にて、始と終と我一身の中の理にて唯一物にて不可思議なりければ、本と末とは究竟して等しとは說給へる也。是を如是本末究竟等とは申したる也。

（二〇三頁二行）

（B′）

始の三如是を本とし、終の七如是を末として十の如是にてあるは、我身の中の三諦にてある也。此三諦を三身如來とも云へば、我心身より外には善惡に付て

不レ聞二此理一不レ存二三無差別一故盲二三道一不レ感二三德一。先佛出世說二今法華一、令レ聞二此理一之時。能化如來ノ三身即衆生三身也ナリ、一如無二二如一。

（C）

譬如二衆水入レ海一味一、故經云汝我等無異如我昔所願、大師釋二三世諸佛出世本懷衆生成佛直道一。然則住二此理一敢不二妄失一者、念々相二應諸波羅密一、步々觀二己心高廣一、身內之如來被レ叩迷暗漸晴、覺月速曜、更不レ可レ疑。如レ是聞二自身本覺之說一、乘二本性一肘之蓮一者、依正一如融通。

かみすぢ計の法もなき物を。されば我身が頓て三身即一の本覺の如來にてはありける事也。是をよそに思を衆生とも迷とも凡夫とも云也。是を我身の上と知ぬるを如來とも覺とも聖人とも智者とも云也。かう明かに觀ずれば此身頓て今生の中に本覺の如來を顯はして、即身成佛とはいはるゝ也。

（C′）

譬は春夏田を作りうへつれば、秋冬は藏に收て心のまゝに用るが如し。春より秋をまつ程は久き樣なれども一季の內に待ち得るが如く。此覺に入て佛を顯す程は久しきやうなれども一生の內に顯はれて我が身が三身即一の佛なりとなりぬる也。此道に入ぬる人にも上中下の三根はあれども同く一生の內に顯はす也。上根の人は開所にて覺を極めて顯はす。中根の人は若は一日若は一月若は一季に顯はす也。下根の人はのびゆく所なくてつまりぬれば、一生の內に限りたることとなれば歸終の時に至て諸のみえつる夢も覺てうつゝになりぬるが如く、只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあと形もなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界をみれば皆寂光の極樂にて日來賤と思ひし我此身が三身即一の本覺の如來にてあるべき也。秋の稻には早と中と晩との三のいね有れども一季が內に收むるが如く、此も上中下の差別ある人なれども同く一生の內

（D）

妙法蓮華則八葉之白蓮理智不二ノ而法界悉寂光也。爰以名疏ニ云ヘ。法身即土、離レ身無レ土、土即法身、離レ土無レ身、住ニ此觀一時自ニ無始一已來色心即是遮那妙境妙智也。三毒妄執悉如ニ昨日夢一。

（E）

故住ニ此觀一持ニ此經一讀ニ誦此經一者、現身普賢菩薩如ニ本願一、現ニ其人前一加ニ守護一、決定有ニ證理一更不レ可レ有レ疑。然則以ニ此信心一觀念讀ニ誦此經一者、可レ成ニ一部十部百部千部功德一者也、故行住坐臥不レ可レ忘ニ此念一。

に諸佛如來と一体不二に思合せてあるべき事也。

（D′）

妙法蓮華經の体いみじくおはしますは何樣なる体にておはしますぞと尋出してみれば、我心性の八葉の白蓮華にてありける事也。されば我身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば、經の名にてはあらずして、はや我身の体にてありけると知ぬれば我身頓て法華經にて、法華經は我身の体を呼び顯し給ける佛の御言にてこそありければ、やがて我身三身即一の本覺如來にてあるもの也。かく覺ぬれば、無始より已來今まで思ひならはしゝ、ひが思ひの妄想は昨日の夢を思ひやるが如くあとかたもなく成ぬる事也。

（E′）

是を信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば、法華經を覺て如法に一部よみ奉るにてある也。十遍は十部、百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべき也。かく信ずるを如說修行の人とは申也。南無妙法蓮華經。

四

前記の對照によつて兩書の關係を考察すれば大体次のやうなことがいへると思ふ。

(1) 十如是事のA′の部分は「法華即身成佛要記」のAの部分を和譯したものとでもいふべきものである。

(2) B′の部分はBの長分を意譯したものである。

(3) C′の部分は、Cの海水一味生佛一如の譬を稻の早中晩の譬に改めたものであらう。

(4) D′の部分は、Dの部分を意譯したものである。

(5) E′の部分は、Eの觀念讀誦思想を唱題思想に改めたものである。

從つて十如是事は、その本文構成上からいへば即身成佛要記の意譯であり、その布衍的註釋であるといはざるを得ない。また思想的に考察すれば、本書の末文に於て、即身成佛要記の觀念讀誦思想を唱題思想に結歸してはゐるけれども、その根本思想に於いては、即身成佛要記の理体本覺思想と基調を同じうするものであつて、會理歸事の唱題思想とは遙かに異なるものである。

なほこゝに注意すべきは、この法華即身成佛要記には和假名書の異本があつたといふことである。即ちこの書の奥書に、

(5) 此書者一條女院。課ニ惠心僧都可ニ令レ注ニ進法華即身成佛之肝要之旨。依レ有レ宣、被ニ書進一レ之。其後朝臣之時、和假名被レ進ニ于女院一本有レ之。世以遍令ニ流布一云云

とある。

そこで十如是事は漢文体のものを底本として和譯したものか、それとも和假名体のものを傳寫したものかの問題が

ある。更にまた十如是事の原本は現行本の如く假名体のものであつたのか、それとも漢文体であつたものを假名体に書改められたものにあらざるかの疑問もある。文和三年（聖滅七十二年）に成る薩摩日叡師の本迹問答十七條に、

戒抄云、如是相者我身の顯れたる色形を云ふ也。

とある文は、十如是事の

如是相者、我身の色形に顯れたる相を云也。

といふ文を指したものであらうと思はれるが、この兩者の讀方の異りは、誤讀によるものか、或は訓點の讀方の相違によりて生じたものか疑問である。されどいま假名体の法華即身成佛要記を見ないし、また漢文体の十如是事を得ないので、十如是事の原形並にその底本がいづれであつたかは斷定しがたいのであるが、そのいづれにしても、十如是事の成立については議すべき點があらうと思はれるのである。

なほまた惠心の作と傳へられる法華即身成佛要記が果して惠心の作なりや否やについての疑問もある。從つて兩書の成立關係についてはもつと根本的な問題が伏在してゐるかも知れない。

註 (1) 宗全興隆全集　四五六頁
(2) 和語式四卷廿一丁
(3) 啓蒙　三十二卷九五丁
(4) 扶老　十二卷二三丁
(5) 惠心僧都全集　三卷二六五頁

この原稿は昭和十年度の卒業論文「御義口傳の研究」の一節たる「遺文に現れたる教相主義と觀心主義の二大系統」の下に於て論じたものを資料として、それに多少筆を加へたものであることを斷つて置く。

—昭和十五年十一月廿八日—